

ど資 九州ブリッジファンド 銀な 初の投資数十億円 肥出

九州の中小企業の事業再生を支援する地域特化型ファンド「九州事業継続ブリッジ投資事業有限責任組合（九州ブリッジ

ファンド）」は、初の投資先に太陽電池パネル製造の「YOCASOL」（大牟田市）を選んだ。

（大牟田市）を選んだ。資本金や設備費など数十億円を投資する。これを受け、同社は十月中にも操業を再開、将来は株式公開を目指す。

同ファンドは中小企業基盤整備機構と、肥後銀行や西日本シティ銀行など五行が計四十八億円を出資し五月に設立。ドーガン・インベストメンツ（福岡市）が運営する。

YOCASOLは、もとは太陽電池パネル大手MSK（東京都新宿区）福岡工場。太陽光発電の基幹部品セルの加工を手掛けていたが、MSKの生産拠点の中国移管

で二月に操業を停止した。

七月に元工場長が事業継続の受け皿となる同社を設立し、旧工場の全従業員三十五人を雇用。資本金四億二千万円のうちファンドが83%、丸紅14%、残り3%を従業員が

企業の一部を買収するEBO方式で出資した。九月にMSKと事業譲渡契約を締結。生産再開後は丸紅の支援を受け、製品のほぼ全量を需要の多いドイツに輸出する計画。

ドーガン社の森大介社長は「従業員たちは優れた技術を持ち、製品の評価は高い。海外で勝負できる九州発の企業になると判断した」と話している。（坂本尚志）